慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Maloryの 'Tale of Gareth' : その超自然的人物について
Sub Title	The supernatural in Malory's 'Tale of Gareth'
Author	高宮, 利行(Takamiya, Toshiyuki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1973
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.32, (1973. 2) ,p.146(25)- 170(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00320001-0170

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Malory の 'Tale of Gareth'

——その超自然的人物について——

高 宮 利 行

I

Sir Thomas Malory は15世紀後半に，当時フランス語で流布していた散文のアーサー王ロマンス（いわゆる Vulgate Cycle および Prose *Tristan*）や，14世紀に英語で書かれたアーサー王ロマンス（Alliterative *Morte Arthure* および Stanzaic *Morte Arthur*）を，自国語の散文に翻案し，アーサー王の誕生から死，円卓騎士団の崩壊に至る長大な散文ロマンスを作りあげた。1934年に W. F. Oakeshott によって発見された写本（The Winchester MS）は，Malory 自身の手による原本ではなく，幾人かの写字生によって転写されたものである。英国最初の印刷出版業者 William Caxton は，Malory の作品に手を加え（とくに Arthur の Roman Campaign の部分には，Caxton の 'modernization' の跡が著しい），1485年，Westminster の印刷工房から *Le Morte Darthur* の題のもとに出版した。この1485年版は現在，New York の Pierpont Morgan Library と Manchester の John Rylands Library に一部ずつ保存されているに過ぎない。しかも，前者のみ完本で，同一の1485年版にもかかわらず，両者のテキストの間には若干の相違がみられる。[1]

1485年以降20世紀はじめまで，Malory の作品は，Caxton 版をもとにして，それに少しずつ修正を施した形で，よき英国の文化遺産として，伝えられ，親しまれてきた。[2] しかし，Thomas Warton や J. J. Jusserand が著わした英文学史の中で，*Morte Darthur* については，わずかの記述しか与えられていない事実は，Malory の作品が，従来，学問的な criticism

の対象としてはあまり高く評価されなかったことを如実に示している。[3] しかるに，前述の Winchester MS が発見され，[4] これに基づいて Eugène Vinaver が1947年に critical edition を世に問うて以来，Malory の作品は，きびしい scholarship の対象となって，今日に至っている。[5]

Malory 学の発達にともなって，彼の作品と sources との関係は，漸次明らかにされてきたが，Vinaver 編集の第4の物語 'The Tale of Sir Gareth of Orkeney' については，まだ直接原拠とされた作品は発見されていない。[6] 'Tale of Gareth' の analogues を，他のアーサー王ロマンスの中に見出そうとする努力は，数多くの学者によってなされ，その立場によって，さまざまな conjectures が与えられてきた。[7]

Source studies を離れても，'Tale of Gareth' は，Malory の作品全体の構造の unity の問題を考える場合，不可欠の物語である。Malory の作品における unity を拒否し，8篇の独立した romances をただまとめたものに過ぎないと考える Vinaver は，'Tale of Launcelot,' 'Tale of Gareth,' 'Book of Tristram' が *Morte Darthur* 全体の構造に何ら関係をもたないとしている。

> Judged as a continuous composition, the work would be 'better' not only without the *Tristram*, but without at least two other romances—*The Noble Tale of Sir Launcelot* and *The Book of Sir Gareth*—altogether some 600 pages out of a total of 1,260. (*Works*, p. xli)

また E. K. Chambers は，'Tale of Gareth' を単なる episode とみなしており，H. S. Bennett も，Malory の作品は individual scenes として鑑賞すべきだと論じている。[8] しかしながら，これらの見解は，*Morte Darthur* の構造における重大な点を見落しているといえよう。第3の物語 'Tale of Launcelot' では，アーサー王ロマンスの事実上の主人公 Launcelot が紹介され，彼の virtues が読者の前に明らかにされる。それに続く 'Tale of Gareth' では，Launcelot と密接な関係をもつに至る若者 Gareth のひととなりが浮彫りにされる。次の 'Book of Tristram' で

Malory は，Arthur-Guinevere-Launcelot の eternal triangle を強調するために，その parallel として，Mark-Isolt-Tristram の物語を位置づけているのである。[9]

そもそも，Arthur 王宮廷没落の原因となったのは，不義密通の科で処刑されようとした王妃 Guinevere を，その愛人 Launcelot が助けるにあたって，愛する騎士 Gareth を誤って殺してしまった事件である。[10] この Launcelot と彼によって騎士に叙された Gareth との関係，[11] 及び最愛の弟を Launcelot に殺されて復讐を誓う長兄 Gawain[12] と Gareth との関係，この二本の糸は，*Morte Darthur* の終末で，明瞭な形をとって表面にあらわれるが，この端緒は，じつはこの 'Tale of Gareth' の中で暗示されている。[13]

しかし，この物語には，のちの catastrophe を引起す悲劇性はまったく感じられず，むしろ Arthur 王宮廷の最も円熟した時期を象徴するような，陽気さにあふれている。[14] 円卓騎士団の終末を考える時，'Tale of Gareth' の中で表現された dramatic irony は，まさに Malory の originality と呼ぶべきものである。この点における 'Tale of Gareth' の重要性は，Wilfred L. Guerin の論文に扱われている[15]ので，ここでは詳述しない。拙論では，これとは異なった角度から，この immediate source の明らかでない 'Tale of Gareth' に光をあててみたいと考える。すなわち，この物語にあらわれる超自然的要素をもつ人物と，Malory，および彼以前に深く広く存在していたアーサー王ロマンスとの関係について論じようとするものである。

Malory が15世紀末にアーサー王ロマンスを集大成するまで，ほぼ数百年にわたって，このケルトの神話，伝説に源を発するといわれる騎士物語は，さまざまな形で語り伝えられてきたのは周知の事実である。いいかえれば，Malory にさきだつ過去の時代から，アーサー王ロマンスに関する物語は，さまざまの修飾・脱線・加筆が施されて，変化してきた。[16] その結果，Malory 自身が直接手にした sources も，この変化の中で，実体もまた精神も，もとの folklore や myth の世界のものとはまったく違った性

質のものになっていた。Malory は，これらの sources を縦横に駆使して，彼独自の *sententia* を吹き込んだのである。'Tale of Gareth' は一見すると，従来のアーサー王ロマンスとはかなりかけ離れているようにおもわれるが，[17] 拙論では，15世紀末に書かれた 'Tale of Gareth' の中に，そこにあらわれる超自然的要素をもつ登場人物を通して，いわば primitive で，unsophisticated なロマンスの世界を見出そうとするものである。

II

本題に入る前に，'Tale of Gareth' の物語の筋を概観しておこう。

聖霊降臨節を祝っている Arthur 王の宮廷に，美しい若者がやってくるが，彼は自らの素姓を明らかにせず，三つの要求を掲げる。若者は第一の要求が認められて，Kay には Beaumains とひどくののしられながらも，皿洗いとして宮廷にとどまり，Launcelot と Gawain には優遇される。一年後，見知らぬ乙女があらわれ，Red Knight of the Red Lands に囚われている奥方を助けてくれる騎士を求める。Beaumains は第二の要求として，この冒険に従うことを許され，出発する。まもなく彼は追いついてきた Kay と戦ってこれを破り，次に Launcelot と戦って引分ける。ここで，彼は Launcelot に，自分が Gawain の弟で Gareth of Orkeney である旨を告げる。そして第三の要求通り，Launcelot によって騎士にしてもらった Gareth は，乙女とともに，一連の戦いの試練を受ける。そのあいだ，乙女は Gareth を，台所で働いていたとして，絶え間なく軽蔑する。彼は，六人の盗人，二人の騎士，Black Knight, Green Knight, Red Knight, Sir Persaunte of Inde らを破り，ある者は殺し，ある者は帰順させる。武勇と 'gentilesse' によって，彼は乙女 Lyonet からも認められ，最後には Red Knight of the Red Lands を破って，囚われの身となっていた Lady Lyones を自由の身として，彼女の愛を得る。

しかし，ここで Lyones は Gareth に対して，一年間の冒険を課す。それに続いて起るさまざまな episodes は，Gareth の武勇，決断力，および純潔を証明する。愛し合う奥方 Lyones と Gareth は，情熱に身をまかせ

ようとするが，二度にわたって，Lyonet が策した不死身の騎士に邪魔され，Gareth は傷を負ってしまう。一方，Gareth の母 Queen of Orkeney は，Arthur 王の宮廷を訪れて，息子の素姓を明らかにする。Gareth は Lyones を宮廷にさし向けて，tournament 開催を Arthur 王に同意させ，槍試合の結果如何では，Gareth 自身が彼女を公けの場で自分のものにできるようとりはからう。しかし tournament の場で，伝令官によって，Gareth の名が明らかにされるや，彼はその場を逃げ去り，次々と，Knight Without Pity, the Duke de la Rouse や Gawain と戦う。Lyonet は，Gawain と Gareth の兄弟に，互いの素姓を明かして，戦いを中止させ，連れだって Camelot に戻る。Gareth の identity が公けに明らかにされたところで，Arthur 王は，Gareth と Lyones を，皆の祝福の中で結婚させる (pp. 293–363)。

i Gareth の dwarf

アーサー王ロマンスには，dwarfs が頻繁に姿をあらわし，その行動は，他に登場する一般人に比べて，はるかに the supernatural としての性格が強い。この 'Tale of Gareth' の中でも，名前は与えられていないが，Gareth と常に関連をもつ dwarf が，随所で神秘的に描かれている。'Tale of Gareth' を含めて，the 'Fair Unknown' Stories と呼ばれる一連の物語群のうち，作者未詳の *Lybeaus Desconus* と Renaut de Beaujeu の *Le Bel Inconnu* には，dwarf の Teondeleyn[18] (後者では Tidogolains[19]) が，Arthur 王のもとへ besieged lady の助けを乞いにいく乙女に随伴する。R. S. Loomis によれば，この dwarf の名は，Chrétien de Troyes の *Erec et Enide* にあらわれる Glodoalan[20] に由来するという。[21]

'Tale of Gareth' では，Gareth が Arthur 王のもとにやってくるさいに dwarf を伴っている (*Works*, p. 293, ll. 15–16)。一年後，Gareth が王に認められて，Damsel Lyonet に従って，besieged lady を助けに出発する時，この dwarf は，立派な武具甲冑を用意してくる (p. 297, ll. 24–27)。[22] Gareth は後を追ってきた Kay と戦って破り，dwarf は Kay の馬

を走らせる (p. 298, ll. 25–26)[23]。この後，dwarf は Gareth および Lyonet と行動をともにし，besieged lady の Lady Lyones のもとで，Gareth の身元と戦歴を明らかにするが，Gareth の名前だけはわざと披露しない (p. 317, l. 12–p. 318, l. 8)。その直後，Lyones は dwarf に酒の用意をさせたり，食物を Gareth のところに持たせていかせる (p. 318, ll. 9–26)。

Dwarf は Gareth のところへ戻り，続いて，Red Knight of the Red Lands と会って，Gareth についての情報を与えるが，やはり，彼の名前は明らかにしない (p. 318, l. 32– p. 319, l. 26)。

Gareth は Lyones を解放して自由の身にするが，彼の思いは聞き届けられず，ついに一年間の武者修業を求められる。それに続く episode は conventional motif で，きわめて重要な意義をもつ。すなわち，dwarf は Lyones の弟 Gryngamoure によって誘拐され，Gareth が怒って助けにおもむくが，その間に，dwarf は主人の名前や育ちを明らかにしてしまう (p. 328, l. 4– p. 331, l. 13)[24]。また，'Tale of Gareth' の終末のはなばなしい戦闘場面では，Lyones が与えた magic ring のおかげで，Gareth は名を知られぬまま大活躍をするが，dwarf は彼から一時的にせよ，ring をとりあげて，Gareth の identity を皆にわからせようとする (p. 350, l. 29– p. 352, l. 22)。dwarf のここにおける意図的な言動は，次の記述で明らかである。

> Than seyde his dwarff, 'Take me your rynge, that ye lose hit nat whyle that ye drynke.' And so whan he had drunkyn he gate on hys helme, and egirly toke his horse and rode into the felde, and leffte his rynge with his dwarff: for the dwarf was glad the rynge was frome hym, for than he wyste well he sholde be knowyn. (p. 350, ll. 29–34).

以上の考察から，'Tale of Gareth' の dwarf の役割は次のように理解される。Gareth はたびかさなる未知の冒険と，Damsel Lyonet からの中傷を克服して，自己の 'gentilesse' を明らかにしていくが，彼自身の identity を少しづつ，Arthur 王はじめ，円卓の騎士および Gareth と戦

う騎士達に暗示していくのに，dwarf はよき媒介者としてのつとめを果している。そして，明らかに Malory は，この dwarf のもつ機能を十分意図的に用いているのである。

ii The Red Knight of the Red Lands

この Red Knight は Sir Ironsyde とも呼ばれている。この騎士が *Morte Darthur* の他の部分でどのように扱われているかを考察してみる。

'Tale of Gareth' の中で，Gareth と死闘を演じ，七人力の騎士と目される Sir Ironsyde の名は，第七の物語 'Tale of Launcelot and Guinevere' で数度言及されるのみである。まず，'The Poisoned Apple' の sub-division で，Queen Guinevere から食事に招待された騎士の一人として名前が挙げられている (p. 1048, l. 21)。'The Knight of the Cart' では，Queen Guinevere とともに May outing にでかけた一人が，'sir Ironsyde that was called the Knyght of the Rede Laundes,' (p. 1120, ll. 29–30) であり，反逆者の Sir Mellygaunce の手にかかって傷を負う。そして最後の episode, 'The Healing of Sir Urry' の 'roll-call list' にも，'sir Ironsyde that was called the noble knyght of the Rede Laundis, that sir Gareth wan for the love of da[m]e Lyones' (p. 1150, ll. 14–16)[25] として挙げられている。

Sir Ironsyde の名は，*Morte Darthur* 以外の現存するアーサー王ロマンスでは，Middle English tail-rhyme romance の *Sir Gawain and the Carle of Carlisle*,[26] ME couplet version の *Carle of Carlisle*[27] や *Sir Lambewell*[28] にあらわれ，後の二つの詩は Percy Folio MS に含まれている。この tail-rhyme romance は，Malory の作品よりおよそ50年位早く，後の二つは Malory の作品よりかなり遅く作られたと考えられている。[29] R.M. Wilson はこの問題に関して，'Tale of Gareth' の lost English source の可能性を考えている。

> It would appear that in Malory's original the knight must have had this obviously English name, and consequently that the lan-

guage of his source for the Gareth story was in English, whether or not it was an adaptation of a French romance of Gaheret. But if this was the case, only these vague reminiscences of the lost English romance now remain.[30]

また，R. S. Loomis は Ironsyde という名と，同じく Percy Folio MS 中の ME romance, *Eger and Grime* の中にあらわれる Graysteel との間に，何らかの結びつきがあるのではないかと示唆している。[31] この *Eger and Grime* と 'Tale of Gareth' との相互関係については，研究の余地があると考えられる。前者のロマンスの名は1497年の記録に残っており，[31] 現存するのは，Percy Folio MS と1687年の printed version の比較的新らしいものなので，今は伝わっていないロマンスとして，15世紀にはすでに知られていたと考えられる。[33]

'Tale of Gareth' における Sir Ironsyde は，弟を Arthur 王の円卓騎士団の一人に殺された女性のために，Launcelot もしくは Gawain を討とうとはかり，その手段として Lady Lyones を城に幽閉して彼等が助けにくるのを待っていたのである。[34] 彼の七人力という超自然的能力は，[35] ケルト起源の英雄に賦与された力である。[36] 前述の Graysteel[37] も Old French romance, *Atre Périlleux* に登場する Escanor も，[38] ともに赤い武具に身を固め，midday に肉体的強さが最強となる点では，Sir Ironsyde と類似している。[39] *Morte Darthur* では，Gawain の力が 'noon' までに三倍化する。[40] これらの能力は，太陽の動きと不可分であり，Gawain をはじめとする騎士達の超自然的能力は，ケルト神話の太陽神に由来している。[41] また，Sir Ironsyde が Red Knight と呼ばれた事実は，ケルト民族の間で，赤は solar colour を象徴したとする Loomis の見解と一致する。[42]

Malory が Sir Ironsyde について強調したことは，'gentilesse' の欠如である。彼は一面 noble knight であるが，courtesy に欠けている。この点で Gareth に劣るのである。Malory が 'Tale of Gareth' で示した *sententia* は，一人の騎士については，'gentilesse' すなわち身分の高貴さと武勇は必らず一致するという点である。[43] よって，家柄・武勇・性格と

も非のうちどころのない Gareth に，Sir Ironsyde は勝てないわけである。後者の 'gentilesse' の欠如は，Lady Lyones が dwarf に向っていう言葉の中で，はっきりと示されている。

> '..., and say hym (Gareth) I thanke hym of his curtesy and goodnesse that he wolde take uppon hym suche labur for me that never ded hym bounté nother curtesy. Also pray hym that he be of good herte and corrage hymself, for he shall mete with a full noble knyght, but he is nother of curtesy, bounté, nother jantylnesse; for he attendyth unto nothyng but to murther, and that is the cause I can nat prayse hym nother love hym.' (p. 318, ll. 19-26)

iii Black, Green, Red and Blue Knights

これらの騎士は，Gareth の初期の冒険に交互に登場する兄弟で，名前はそれぞれ Sir Perarde, Sir Pertholepe, Sir Perimones, Sir Persaunte of Inde と頭韻を踏んでいる。このうち，はじめの三人は 'Tale of Gareth' 以外では登場しないが，[44] Sir Persaunte of Inde は 'Tale of Launcelot and Guinevere' で，前述の Sir Ironsyde の場合とまったく同じように扱われている。[45] またこれらの騎士は往々にして混同して用いられる。[46] R.S. Loomis は各色のもつケルト的意味，および Pertholepe と，*Sir Gawain and the Green Knight* にあらわれる Bercilak との類似性を指摘している。[47] Persaunte は Red Knight of the Red Lands が七人力の力をもつことや，Lyonet ならびに Lyones のことについても熟知している (p. 315, ll. 28-35)。Gareth が Persaunte と戦ってこれを破り，慈悲を与えて命を許してやると，Persaunte は自分の生娘を，Gareth の寝室にはべらすが (p. 314, l. 26- p. 315, l. 21)，[48] これは Gareth の chastity への試練となる。この時の Gareth のセリフは一見 *Sir Gawain and the Green Knight* を思い出させる。'Maid of Astolat' の episode[49] にもよく似たこの場面を重視した Larry D. Benson は，'Tale of Gareth' を *Morte Darthur* の

うちでも，最もイギリス的な物語としている。[50] 一方，Helaine Newstead は *Fergus* の中に，同様の parallel を見出している。[51]

iv Lyones と Lyonet

B. F. Fiester は，博士論文 'The Function of the Supernatural in Malory's *Morte Darthur*'[52] において，Malory の作品中にあらわれる超自然的人物五名 (Merlin, Morgan le Fay, Nyneve, Balin, Galahad) を選び，Malory がこれらの the supernatural をいかに取扱ったかを，sources と照らし合わせて比較研究した。その結果，E. Vinaver もいう通り，[53] Malory は the supernatural よりも the realistic に大きな関心をはらったのは事実であるが，sources 中の the supernatural を扱う場合，*Morte Darthur* 全体の構造の流れおよび意味を考慮に入れながら，終始一貫，unity の idea のもとに加筆，修正を施した。特に Merlin と Morgan le Fay については，前者は Arthur 王のために行動し，後者は王をおとしいれようとする，いわば good と evil の両極端に位置する the supernatural としてとらえ，とりわけ，Morgan は Arthur との血縁関係から，王と円卓騎士団の *dénoument*，および Avalon へ王を運び去る場面に果す重要な機能を初めから有していたことを，Fiester は強調した。

この項では，*Morte Darthur* 全体からみた Morgan le Fay の役割について詳述するのではなく，むしろ 'Tale of Gareth' (ここでは Morgan の名は一度としてあらわれない) の中における Morgain analogue に関して考えようとするものである。[54] Morgain la Fée に関する記述は，周知のごとく，Geoffrey of Monmouth の *Vita Merlini* (1148年) にまでさかのぼり，その先はケルトの folklore や myth の世界につながっている。[55]

Morgain la Fée は彼女自身いくつかの特徴ないしは attributes を保持している。Lucy A. Paton の研究成果から，それらを分類して列挙すると，次のようになる。[56]

1. 妖精の国 Avalon の女王，すなわち Queen of the Other World である。

2. 人の傷をたちまちいやす魔術的能力をもつ。

3. 現在より先の時点で起る事象を予知する fée としての能力をもつ。

4. きわめて美しい時があるかと思えば，ひどく醜い時がある。[57] 要するに，変幻自在の shape-shifting の能力をもつ。

5. 自分のお気に入りの者にはたちまち恋心を感じ，熱烈な恋愛におちる。[58]

6. Arthur に対して，飽くなき敵意をもつ場合と，まったく反対の感情をもつ場合とがある。

7. Queen Guinevere に徹底した敵意を抱く。

8. Arthur の sister（或る時は niece）にあたる。

9. 復讐心が強い。

10. 愛する者へ贈り物（白馬が多い）を与える。

11. Merlin と関係をもつことが多い。

Morgain la Fée は water-fay としての性格をもつ場合がしばしばある。すなわち，浦島伝説にも共通するが，自分の国（仙境）に気に入った男を誘惑して，月日の流れを忘れさせる物語が，Morgain に結びつけられている。[59] Paton は Morgain の prototype を，Irish war-goddess の Morrigan に求めている。この war-goddess の役割は，北欧神話にあらわれる Valkyres のそれに似ており，戦場で傷つき，死んだ勇者を他の場所に運び去る。[60] Modred との死闘に傷ついた Arthur 王を，妖精の島に運ぶ Morgan le Fay には，この性格が認められる。[61] そこで Arthurは 彼女に瀕死の身体をなおしてもらうのである。[62]

'Tale of Gareth' の Lady Lyones は，上述の Morgain la Fée の attributes のうち，かなりの部分を共有している。まず彼女が Avalon の女王であることは，'Tale of Gareth' に明確に示されている。

> Whan dame Lyonesse was com to the Ile of Avylyon—that was the same ile thereas hir brother, sir Gryngamour, dwelled—than she tolde hem all how she had done, and what promyse she had made to kynge Arthure. (p. 342, ll. 8–11)

Lyones は，Avalon に近い 'Castell Perelus' に居住している (p. 343, ll. 13–14)。

ところで，Chrétien de Troyes の *Erec et Enide* には，Avalon に関する重要な reference が見出される。

et Guingamars ses frere i vint,
de l'isle d'Avalons fu sire:
de cestui avons oï dire
qu'il fu amis Morgant la fee,
et ce fu veritez provee.[63]

Erec et Enide の Guingamars と 'Tale of Gareth' の Gryngamoure は同一人物だと考えてよい。

だが，前者が Morgain la Fée の恋人であるのに対して，後者は Lady Lyones の弟である。[64] Gryngamoure は，Lyones の命令で Gareth の dwarf を盗み出す (p. 328, l. 4– p. 331, l. 13)[65] ほかは，あまり functional character としては活躍しないが，'one of the perelyst knyghtes of the worlde' (p. 329, ll. 13–14) であり，黒装束で身を固めている点からも，黄泉の国の王と考えてよいであろう。

And this sir Gryngamoure was all in blak, his armour and his horse and all that tyll hym longyth. (p. 328, ll. 26–28)

Guingamars—Gryngamoure の analogues をたどっていくと，Marie de France の *Lanval* や *Guingamor, Graelent* などの主人公までさかのぼることができる。[66] Lanval も Avalon の lord になるから，[67] 彼の mistress (*Sir Launfal* の Triamour)[68] も，*Erec et Enide* の Morgain la Fée と一致する。[69] なるほど 'Tale of Gareth' と *Erect et Enide* の 'Joie de la Cort' とは，物語に似かよった部分が多いが，[70] Malory がこれを source として用いたとは考えられず，ともに究極の source を同じくして，異なる系統の発展を遂げたものであろう。[71]

Lady Lyones はその妹 Damsel Lyonet 同様，healing power に恵まれている。[72] この二人の姉妹は同一人物から分れてできた人物と考えられる。[73]

Lyonet は Lyones の *alter ego* として，Gareth を誘い出し，彼を Lyones に結びつける役目を果す。妹の Lyonet の方が，Lyones よりも sorceress として強い healing power をもっている。Gareth が Lyones と，互いの情熱に身を任せようとした時，Lyonet は二人の名誉を考慮して，一人の騎士に二人を邪魔させる。戦ったあげく，Gareth に殺された騎士の身体を，Lyonet がもとのようになおす場面は，彼女の healing power を最も端的に表現している。

> And forthwithall com dame Lyonett and toke up the hede in the syght of them all, and anoynted hit with an oyntemente thereas hit was smyttyn off, and in the same wyse [s]he ded to the othir parte thereas the hede stake. And then she sette hit togydirs, and hit stake as faste as ever hit ded. And the knyght arose lyghtly up and the damesell Lyonett put hym in hir chambir. (p. 334, ll. 20–26)

> Ryght so come this damesell Lyonett before hem all, and she had fette all the gobbettis of the hede that sir Gareth had throwe oute at the wyndow, and there she anoynted hit as she dud tofore, and put them to the body in the syght of hem all. (p. 335, ll. 31–34)

'Tale of Gareth' では，これとは別に，Lyonet は Gareth, Ironsyde, および Gawain の傷を魔術によってなおす。[74] 一方，Malory の記述から判断すると，Lyones は妹ほど強い healing power をもっていないようであるが，一度は，Gryngamoure と二人で，Gareth の傷の手当てをする。(p. 334, ll. 18–19)。恋路を妨げるために Lyonet が送った騎士と二度目に戦った Gareth は，受けた傷が完治しない (p. 336, ll. 4–7) ので嘆く (p. 342, ll. 11–15) が，Lyones の手当てによって全快する。

> And than she leyde an oynemente and salve to hym as hit pleased hir, that he was never so freyshe nother so lusty as he

was tho. (p. 342, ll. 19-21)

R. S. Loomis は，この二人の姉妹の healing power を聖杯伝説と結びつけているが，[75] Lyonet が派遣した騎士が Gareth と戦う場面で，二十本のたいまつのような明るい光が突然あらわれる部分も，聖杯伝説との関連で注目すべき点である。[76]

この Lyones-Lyonet は，fée がもつ超自然的能力のひとつとして，将来起りうることを予期する力を与えられている。[77] Lyonet は Gareth がこれから遭遇する冒険をたびたび予告している。[78] またこの二人は，何らの information も得ていないのに，関係者のことをすでに熟知している場合が多い。[79] Lyonet はさらに Gareth に対して，tournament での作戦までさずけている (p. 342, ll. 22-28)。

Lady Lyones は世にもまれな美しい女性である。Gareth がはじめて彼女の姿を仰ぎみた時，その美しさに圧倒される (p. 321, ll. 25-27)。次に城主婦人に会った時，それを Lyones とは知らぬ Gareth は，その美しさに感嘆する (p. 331, ll. 19-20)。Lyones はこのように，shape-shifting の能力をもち，それを自分の所有する magic ring に負う場合もある。

> ...for that rynge encresyth my beawté muche more than hit is of myself. (p. 345, ll. 17-18)

その後，Arthur 王のもとにやってきて，Gareth と結婚の契りを結ぶ時の Lyones は，まさに絶世の美女である (p. 359, ll. 19-20)。

Lyones は Gareth と会った時から，激しい恋の情念にかられる。自分を恐ろしい Red Knight of the Red Lands から自由の身にしてくれた Gareth に対して，残酷にも，一年間の武者修業の冒険を課す Lyones も，彼に対する真実の誓いの中で，自らの愛を語る。

> And trust me, fayre knyght, I shall be trewe to you and never betray you, but to my deth I shall love you and none other.' (p. 327, ll. 25-27)

その後も，Lyones の Gareth に対する気持はしばしばうかがわれる。[80] 彼女の愛にこたえて Gareth の心も激しく燃えあがる。[81] そして二人は同衾

しようと積極的になるが[82]，彼等の二度にわたる試みは失敗に帰した。それは Lyones の *alter ego* である Lyonet が，Lyones の愛の性急さを心配し，また二人の恋人の 'worship' を考慮に入れて，魔術によって恋を妨げたのである[88]。Lyonet は，騒動の後，Gareth にむかって，なぜ自分が魔法を用いたかについて説明する。

> ..., 'all that I have done I woll avowe hit, and all shall be for your worshyp and us all.' (p. 334, ll. 32–34)
>
> '..., and all that I have done shall be to your worshyp and to us all.' (p. 336, ll. 2–3)

Lyones と Gareth は，正式に Arthur 王に認められて結婚する[85]。この時，興味深いことに，Gareth の兄弟 Gaherys と Aggravayne が Lyonet, Lowrell (Lyones の姪) と一緒に結婚式をあげる。Lyones と Lyonet が，同一人物に源があり，Gareth と Gaherys が，元来同一人物であったことを考える時，この二組の結婚は，Lyones-Lyonet と Gareth-Gaherys の結びつきとなる[86]。

この結婚式という happy ending をもつ episode は，Vinaver によれば，フランスのアーサー王ロマンスとはまったく無縁のものであり，Malory の original と考えられる[87]。

'Tale of Gareth' に Morgan le Fay はあらわれないが，Morgause という名が言及される (p. 317, l. 8)。Gawain 兄弟の母親の名は多くの場合 anonymous であり，*Morte Darthur* においてのみ Morgause という名が与えられている。Malory のこの誤りは，フランス語の Prose *Merlin* を 'Tale of King Arthur' に移した passage から発している[88]。Morgause は Duke of Tintagel と Igrayne の間に生れた子供で，Arthur 王の half-sister にあたる[89]。彼はこの Morgause との incest によって，Modred をもうけ[90]，後の破局の糸口を作った。R. S. Loomis は Lady Lyones (或いは Dame Lyones) の名が，Tristram の生地 Lyones に由来していると考え，Lyones = Leonois = Lodonesia = Lothian の推測により，Lady Lyones および Morgause (Lady of Lothian) は，その prototype に

Morgain la Fée があったと論じている。[91] 'Tale of Gareth' の Morgause も超自然的な存在であることをにおわせている。すなわち12年 (Caxton 版では 15 年) ぶりに Gawain 兄弟に会いにきた彼女は，すでに自分の息子 Gareth が Arthur 王宮廷で受けた待遇について熟知しており，[92] Kay が Beaumains という nickname を与えたことまで見抜いている (p. 340, ll. 14–21)。この Morgause も，Gareth に会うと気絶する (p. 358, ll. 21–26)。

Morgause, すなわち Queen of Orkeney は 'Tale of Gareth' の中で二度，Queen Guinevere と並んで言及される。[93] これは Morgause と Guinevere のただならぬ関係，いいかえるならば，Morgain la Fée と Guinevere の敵対関係を暗示してはいないだろうか。(ちなみに，'Tale of Gareth' で，Guinevere の名があらわれるのはこの二ケ所だけである。) もっとも，この例は，*Sir Gawain and the Green Knight* の中にあるはっきりした passage と比較したら，およそ比べものにならぬほどであるが。

> Ho wayned me þis wonder your wyttez to reue,
> For to haf greued Gaynour and gart hir to dyȝe
> With glopnyng of þat ilke gome þat gostlych speked
> With his hede in his honde bifore þe hyȝe table.[94]

Morgain は多くの場合，愛する者に白馬を与えるが，[95] Lyones は Gareth に自らの色を変化させることのできる magic ring[96] を贈り，弟 Gryngamoure が，馬・甲冑・刀を贈った。[97] また Morgain la Fée は sparrowhawk と関係が深いが，[98] Lyones は tournament に勝利を収めた騎士には，自分自身と土地，もしくは王冠と 'white jarfawcon' を与えるという条件を示している (p. 341, ll. 19–25)。

以上考察してきた諸点より，'Tale of Gareth' にあらわれる，Lady Lyones, Lyonet, Morgause は，Morgain la Fée のもつ主な属性十一の項目のうち，第 1, 2, 3, 4, 5, 7, 8, 10 の項目については，かなり密接な対応が認められることが判明した。この結果から，Lyones-Lyonet と Morgan-Morgause は，その prototype として，同一の character に源を発しているという仮説を構成できよう。[99]

拙論のはじめに述べたように，*Morte Darthur* のうち，'Tale of Gareth' については未だに immediate source が明らかにされていない。今ここで導き出された仮説は，この source study との関連でも，きわめて重要である。なぜなら，Malory が 'Tale of Gareth' を書くにあたって典拠とした作品は，じつは，Morgain la Fée, ないし彼女のもつ character から派生した超自然的人物が，主要な役割を担って登場する物語ではないかと考えられるからである。W. L. Guerin は 'Malory had before him in the writing of this "Tale" no "source," at least not in the sense that we use in considering the other segments of *Le Morte Darthur*'[(100)] と論じている。しかし論者は，むしろ，Malory は 'Tale of Gareth' を書くさい source を用いた，そしてその source は Morgain la Fée と深くかかわりをもつ物語であったと推論する。

本稿は昭和46年9月18日の藝文学会研究発表会で「『ガレスの物語』における妖姫モルガン」と題して口頭発表した原稿に加筆・改訂を施したものである。

[Bibliographical Notes]

(1) E. Vinaver, ed., *The Works of Sir Thomas Malory*, 3 vols. (1947; 2nd ed. Oxford: Clarendon Press, 1967), pp. cxxvii-cxxxi. Malory の作品のテキストは，今後，第2版を *Works* と略称して用いる。

(2) Caxton 以降出版された *Le Morte Darthur* の諸版については次の著作を参照のこと。
H. O. Sommer, ed., *Le Morte Darthur by Syr Thomas Malory*, II (London: Nutt, 1890), pp. 1-17; E. Vinaver, *Malory* (1929; rpt. Oxford: Clarendon Press, 1970), pp. 189-196; T. C. Rumble, 'A Survey of the Editions and Criticism of Sir Thomas Malory's *Morte D'Arthur*,' Diss. (M.A.) Tulane 1950, pp. 6-31.

(3) T. Warton, *History of English Poetry from the Twelfth to the Close*

of the Sixteenth Century, ed. W. C. Hazlitt (1871; rpt. New York: Haskell House, 1970), II, pp. 118, 189; III, p. 185; J. J. Jusserand, *A Literary History of the English People*, 2nd ed., II (London: T. Fisher Unwin, 1906), pp. 33-34.

(4) Winchester MS の発見については, W. F. Oakeshott, 'The Finding of the Manuscript,' *Essays on Malory*, ed. J. A. W. Bennett (Oxford: Clarendon Press, 1963), pp. 1-6 に詳しい。

(5) *Works* 初版で Vinaver は, critical works の bibliography として91点の著作を掲げているが, 1967 年の第 2 版では, その数は, ほぼ二倍の179点に達しており, 現在ではさらになお数十点を追加せねばならない。*Morte Darthur* の最も詳しい bibliography については, A. E. Hartung, general ed., *A Manual of the Writings in Middle English 1050-1500*, III (Hamden, Connecticut: Archon, 1972), pp. 911-924 (compiled by R. H. Wilson) を参照のこと。

(6) 第7話 'The Tale of Sir Launcelot and Queen Guinevere' 中の 'The Great Tournament' と 'The Healing of Sir Urry' の episodes に関する immediate sources も未詳。

(7) 'Tale of Gareth' の source study および literary criticism については次の諸論文がある。

H. O. Sommer, *op. cit.*, III (1891), pp. 8-9; V. D. Scudder, *Le Morte Darthur of Sir Thomas Malory: A Study of the Book and Its Sources* (London: Dent, 1921), pp. 217-225; E. Vinaver, 'A Romance of Gaheret,' *Medium Ævum*, I (1932), 157-167; R. S. Loomis, 'Malory's Beaumains,' *PMLA*, LIV (1939), 656-668; E. Brugger, '"Der Schöne Feigling" in der arthurischen Literatur,' *Zeitschrift für Romanische Philologie*, LXI (1941), 1-44; LXIII (1943), 123-173, 275-328; LXV (1949), 121-192, 289-433 (筆者未見); R. H. Wilson, 'The "Fair Unknown" in Malory,' *PMLA*, LVIII (1943), 1-21; E. Vinaver, *Works* (1947), pp. 1417-1431; 2nd ed. (1967), 1427-1442: W. L. Guerin, 'The Functional Role of Gareth in Malory's *Morte Darthur*,' Diss. (M.A.) Tulane 1953; M. Donner, 'The Backgrounds of Malory's *Book of Gareth*,' Diss. Columbia 1956; C. C. D. Schmidz, *Sir Gareth of Orkeney: Studien zum Siebenten Buch von Malory's Morte Darthur* (Groningen: Wolters, 1963); W. L. Guerin, '"The Tale of Gareth": the Chivalric Flowering,' *Malory's Originality*, ed. R. M. Lumiansky (Baltimore: Johns Hopkins, 1964), pp. 99-117; R. S. Loomis, 'The Structure of Malory's "Gareth",' *Studies in Language and Literature in Honour of Margaret*

Schlauch, ed. M. Brahmer et al. (Warsaw: PWN, 1966), pp. 219-225; L. S. Martin, 'Sir Thomas Malory's Vocabulary in "The Tale of Arthur and Lucius," "The Tale of Sir Gareth," and "The Tale of the Sankgreal": a Comparative Study,' Diss. Pennsylvania 1966; R. W. Ackerman, '"The Tale of Gareth" and the Unity of *Le Morte Darthur*,' *Philological Essays: Studies in Old and Middle English Language and Literature in Honour of Herbert Dean Meritt*, ed. J. L. Rosier (The Hague: Mouton, 1970), pp. 196-203.

(8) E. K. Chambers, *Sir Thomas Wyatt and Some Collected Studies* (1933; rpt. New York: Russell & Russell, 1965), p. 27; H. S. Bennett, *Chaucer and the Fifteenth Century* (Oxford: Clarendon Press, 1947), p. 201.

(9) この unity の観点に立つ見解については, R.M. Lumiansky, ed., *Malory's Originality*, pp. 91-183 の Lumiansky, W. L. Guerin, T.C. Rumble の essays, および C. Moorman, *The Book of Kyng Arthur: The Unity of Malory's Morte Darthur* (Lexington: University of Kentucky Press, 1965), pp. 13-27 に詳しい。

(10) *Works*, p. 1177, ll. 31-34: cf. J. D. Bruce, ed., *Le Morte Arthur* (EETS ES 88, 1903), l. 1962.

(11) *Works*, p. 299, ll. 19-32.: cf. *Works*, p. 1110, ll. 32-34; p. 1113, ll. 4-6; p. 1114, ll. 10-12; p. 1162, ll. 28-29; p. 1189, l. 14; p. 1199, ll. 11-28.

(12) *Works*, p. 1183, ll. 27-31; p. 1184, ll. 28-30; p. 1184, l. 34- p. 1185, l. 3; p. 1185, ll. 15-17; p. 1185, l. 21; p. 1186, ll. 10-12; p. 1189, ll. 12-14; p. 1191, ll. 13-15; p. 1200, ll. 15-17.

(13) *Works*, p. 295, ll. 9-12; p. 295, ll. 27-35; p. 296, ll. 3-5; p. 299, l. 36-p. 300, l. 4; p. 326, ll. 19-32; p. 357, ll. 10-12.

(14) V. D. Scudder, *Le Morte Darthur of Sir Thomas Malory*, p. 218.

(15) W. L. Guerin, 'The Functional Role of Gareth in Malory's *Morte Darthur*,' Diss. (M. A.) Tulane 1953; '"The Tale of Gareth": the Chivalric Flowering,' *Malory's Originality*, pp. 99-117.

(16) アーサー王ロマンスの起源については, たとえば, 次の著作に詳しい。J. D. Bruce, *The Evolution of Arthurian Romance from the Beginnings down to the Year* 1300, 2 vols., 2nd ed. with a supplement by A. Hilka (1928; rpt. Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1958); A. C. L. Brown, *Iwain: A Study in the Origins of Arthurian Romance* (1903; rpt. New York: Haskell House, 1965).

(17) Sommer, *op. cit.*, III, pp. 8-9; Vinaver, *Malory*, p. 138; Scudder, *op. cit.*, pp. 218-219.

(18) M. Mills, ed., *Lybeaus Desconus* (EETS 261, 1969), l. 133 (Teandelayn), l. 481 (Teondeleyn). *Lybeaus Desconus* についての reference は，すべて同書 MS. Cotton Caligula A. II. のテキストによる。なお，他の写本における dwarf の名の spelling variants については， Mills, p. 271 を参照のこと。

(19) G. P. Williams, ed., *Renaut de Beaujeu: Le Bel Inconnu* (CFMA, 1967), l. 260.

(20) M. Roque, ed., *Erec et Enide* (CFMA, 1968), l. 1953.

(21) R. S. Loomis, *Arthurian Tradition and Chrétien de Troyes* (New York: Columbia University Press, 1949), pp. 142, 484. 'Fair Unknown' group のうち *Wigalois* と *Carduino* にあらわれる dwarf には名前が与えられていない。 なお， Teondeleyn に関しては， V. J. Harward, *The Dwarfs of Arthurian Romance and Celtic Tradition* (Leiden: E. J. Brill, 1958), pp. 88-89 参照。

(22) Cf. *Works*, p. 340, ll. 3-13. Lybeaus は出発に際して，円卓の騎士たちから武具を与えられる。Mills, *op. cit.*, ll. 205-240.

(23) この部分は入組んでいるが，context からみて，'his dwarf' は Gareth's dwarf ととるべきだろう。

(24) Cf. *Works*, p. 1437, note to p. 328, l. 5- p. 331, l. 13. 誘拐された dwarf を主人公が助ける他の物語については， Harward, *op. cit.*, pp. 134, 137-139 を参照。

(25) 同ページ， ll. 29-32 に，'sir Persaunte, sir Pertolope, hys brothir, that was called the Grene Knyght, and sir Perymones, brother unto them bothe, whych was called the Rede Knyght, that sir Gareth wanne whan he was called Bewmaynes' とあるが， Lyones, Bewmaynes は，*Morte Darthur* のうち，'Tale of Gareth' を除くと， この部分にしかあらわれないことは重要な意味をもつ。この二人の名前は， ともに， 他のアーサー王ロマンスにはみられないからである。

(26) A. Kurvinen, ed., *Sir Gawain and the Carl of Carlisle in Two Versions* (Helsinki, 1951), ll. 67-102.

(27) *Ibid.*, ll. B 37-60.

(28) J. W. Hales and F. J. Furnivall, edd., *The Percy Folio of Old English Ballads and Romances*, rev. I. Gollancz (London: De la More Press, 1905), I, p. 82, ll. 43-44. l. 41 の 'Sir Garrett' は， Malory の Gareth と一致するかもしれない。

(29) J. B. Severs, general ed., *A Manual of the Writings in Middle English 1050-1500*, I (New Haven, Connecticut: Archon, 1967), pp. 59-61, 138

-140. なお *Sir Lambewell* と物語の伝統を同じくする Marie de France の *Lanval*, ME *Sir Landevale*, ME *Sir Launfal* のいずれにも，Sir Ironsyde への allusion はみられない。

(30) R. M. Wilson, *The Lost Literature of Medieval England*, 2nd ed. (London: Methuen, 1970), p. 119. A. Kurvinen も同様の可能性を考えている。*Op. cit.*, pp. 107-109.

(31) R. S. Loomis, *Celtic Myth and Arthurian Romance* (1927; rpt. New York: Haskell House, 1967), p. 86.

(32) この romance への allusions については，D. Laing, ed., *Early Metrical Tales; Including the History of Sir Egeir, Sir Gryme, and Sir Gray-Steill* (Edinburgh: Laing, 1826), pp. vii-xxiv に詳しい。

(33) R. M. Wilson, *op. cit.*, p. 121; cf. R. H. Wilson, *PMLA*, LVIII (1943), 19; Hartung, *A Manual of the Writings in Middle English 1050-1500*, III, p. 767.

(34) この理由は H. Newstead が指摘するように，こじつけでしかない。H. Newstead, 'The Besieged Ladies in Arthurian Romance,' *PMLA*, LXIII (1948), 804; cf. 807.

(35) *Works*, p. 296, ll. 33-35; p. 315, l. 31; p. 321, ll. 1-3.

(36) M. Donner, 'The Backgrounds of Malory's *Book of Gareth*,' Diss. Columbia 1956, pp. 171-180 をみよ。

(37) W. H. French and C. B. Hale, edd. *Middle English Metrical Romances*, II (1934; rpt. New York: Russell & Russell, 1964), p. 699, ll. 890-894. Cf. Donner, *op. cit.*, p. 177; Kurvinen, *op. cit.*, p. 109.

(38) B. Woledge, ed., *L'Atre Périlleux* (CFMA, 1936), ll. 1516 f., 1560-1569.

(39) これは R. S. Loomis によって指摘された。彼はまた，*Erec et Enide* にも同様な parallel を発見している。Loomis, *Celtic Myth*, pp. 22, 86; *PMLA* LIV (1939), 663. E. Brugger は，Ironsyde と *Lybeaus Desconus* に登場する Yrain と Maboun という兄弟の necromancers との関連について論じているという（筆者未見）。

(40) *Works*, p. 161, ll. 5-12; p. 1216, ll. 31-34; cf. p. 1356, note to p. 161, ll. 5-7; Bruce, *Le Morte Arthur*, ll. 2802-2807.

(41) E. K. Chambers, *English Literature at the Close of the Middle Ages* (Oxford: Clarendon Press, 1945), p. 191; Loomis, *Celtic Myth*, p. 86; *Arthurian Tradition*, p. 165.

(42) *Celtic Myth*, pp. 44-46; *Arthurian Tradition*, p. 165.

(43) この問題について筆者は，中世英文学談話会（昭和47年7月15日，於東京教育大）で「Malory の 'Tale of Gareth'——その構造と意味」と題して研

究発表をおこなった。

(44) L. S. Martin は第9回国際アーサー王学会 (昭和45年8月, 於 University of Wales, Cardiff) で, 'Onomastics in the "Tale of Sir Gareth"' という研究発表をおこなった。その中で, Martin は, Gareth と Richard Beauchamp, Earl of Warwick の結びつきが, この三人の騎士をはじめとして 'Tale of Gareth' のみに特徴的にあらわれる様相(色彩の重視, Lyones の magic ring, courtesy の強調) を解く鍵ではないかと考え, 従来, W.H. Schofield と E. Vinaver によって提起され, R. S. Loomis によって否定された, Richard Beauchamp と Gareth を結びつける external evidence の再検討を主張した。*BBSIA*, XXI (1969), 165.

(45) *Works*, pp. 1048, 1120, 1123-1124, 1150.

(46) *Works*, p. 347, ll. 20-21; cf. p. 1439, note to p. 347, ll. 20-21.

(47) *Celtic Myth*, p. 85.

(48) Cf. *Works*, pp. 1435-1436, note to p. 305, l. 6- p. 308, l. 14.

(49) 特に *Works*, p. 1089, ll. 21-23 と p. 315, ll. 9-18 を比較せよ。

(50) L. D. Benson, 'Sir Thomas Malory's *Le Morte Darthur*,' *Critical Approaches to Six Major English Works*, ed. R. M. Lumiansky and H. Baker (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1968), p. 130, note 123.

(51) *PMLA*, LXIII (1948), 807. Host の娘による誘惑場面は Ulrich von Zatzikhoven の *Lanzelet* (trans. K. G. T. Webster, New York: Columbia University Press, 1951) pp. 34-43 にもみられる。

(52) Diss. Pennyslvania State 1966.

(53) *Works*, 1st ed., 1947, p. xxiii.

(54) Morgan le Fay に関して注目すべき点は, *Morte Darthur* では, この名前は le Fay (もしくは Fey) と一貫して masculine form を示している事実である。J. D. Bruce は Anglo-Norman dialect としての masculine form を提示している。*The Evolution of Arthurian Romance*, I, pp. 80-81. (なお, Old Welsh では, Morgan は男の名であったという点については次の著作を参照のこと。F. Bogdanow, 'Morgain's Role in the Thirteenth-century French Prose Romances of the Arthurian Cycle,' *Medium Ævum*, XXXVIII (1969), 131, note 16; Loomis, *Arthurian Tradition*, p. 307). この意見は, L*aun*celot の綴り同様, Gare*th* の spelling に関する R. S. Loomis の hypothesis ([t] に対する Anglo-Norman の th の spelling) と一致する。*PMLA*, LIV (1939), 659-660; 'Onomastic Riddles in Malory's *Book of Arthur*,' *Medium Ævum*, XXV (1957), 186; *Studies in Language and Literature in Honour of Margaret*

Schlauch, p. 220. 近年, L. S. Martin は 'Tale of Gareth' の vocabulary と, 'Arthur and Lucius' および 'Tale of Sankgreal' と, それぞれの sources の vocabulary との比較研究から, 'Tale of Gareth' の vocabulary には, Anglo-Norman words の占める割合が大きいことを見出している。'Sir Thomas Malory's Vocabulary in "The Tale of Arthur and Lucius," "The Tale of Gareth," and "The Tale of the Sankgreal": A Comparative Study,' Diss. Pennsylvania 1966.

(55) Morgain la Fée の詳しい研究については, 次に掲げる論文を参照のこと。L. A. Paton, *Studies in the Fairy Mythology of Arthurian Romance*, 2nd ed. enlarged by R. S. Loomis (New York: Burt Franklin, 1960); Loomis, 'Morgain la Fée and Celtic Goddesses,' *Wales and Arthurian Legend* (Cardiff: University of Wales Press, 1956), pp. 105-130. M. M. Olstead, 'The Role and Evolution of the Arthurian Enchantress,' Diss. Florida 1959. なお, 次の論文は筆者未見。H. G. Morgan, 'The Character of Morgan le Fay in Arthurian Romance,' Diss. (M. A.), Southern Mississippi 1963.

(56) Paton, *op. cit.*, p. 40.

(57) J. R. R. Tolkien and E. V. Gordon, edd., *Sir Gawain and the Green Knight*, 2nd ed. revised by N. Davis (Oxford: Clarendon Press, 1967), p. 130, note to l. 2460.

(58) Newstead, *PMLA*, LXIII (1948), 810.

(59) A. J. Bliss, ed., *Thomas Chestre: Sir Launfal* (London: Nelson, 1960), pp. 19-20. Lorelei 伝説もこの類と考えられよう。また, water fay ではないが, Tannhäuser 伝説と結びついた Venus と Venusburg は, 性格的に Morgain と Avalon に近い点が見出される。この種の考察については次の著作参照。J. L. Weston, trans., *Arthurian Romances Unrepresented in Malory's Morte Darthur*, IV (1900; rpt. New York: AMS, 1970), pp. v-xi; H. R. Patch, *The Other World According to Descriptions in Medieval Literature* (1950; rpt. New York: Octagon, 1970).

(60) Paton, *op. cit.*, pp. 11, 12, 148-150. この説には反対も多い。たとえば, Bruce, *The Evolution of Arthurian Romance*, I, p. 79; Tolkien and Gordon, *op. cit.*, p. 129, note to l. 2452.

(61) *Works*, p. 1240, l. 12- p. 1241, l. 4.

(62) Paton, *op. cit.*, pp. 8, 25-48.

(63) M. Roque, *Erec et Enide*, ll. 1904-1908.

(64) *Le Livre d'Artus* では, Morgan の恋人の名は Guiomar である。H. O. Sommer, ed., *The Vulgate Version of the Arthurian Romances*, VII

(1916; rpt. New York: AMS, 1969), p. 135.

(65) その少し後の p. 331, l. 27 の 'And thes ...' は写本の 'All thes ...' の誤りである。Cf. Winchester MS, fol. 133r; E. Vinaver, ed., *Malory Works*, 2nd ed. (London: Oxford University Press, 1971), p. 204, l. 27.

(66) Bliss, *op. cit.*, pp. 18-21.

(67) *Ibid.*, p. 128. J. Rychner, ed., *Le Lai de Lanval* (Genève: Droz, 1958), l. 641: 'Od li s'en vait en Avalun.'

(68) Harward, *op. cit.*, p. 77.

(69) E. M. O'sharkey は第9回国際アーサー王学会 (註44参照) の, 'The Identity of the Fairy Mistress in Marie de France's *Lai de Lanval*,' と題する研究発表の中で, *Lanval* にあらわれる heroine を Morgain と identify し, courtly literature における Morgain と Guinevere の敵対関係を示す最も古い例としての *Lanval* に注目した。*BBSIA*, XXI (1969), 146-147.

(70) この二つの物語の比較研究については, M. Donner, *op. cit.*, pp. 34-41; C. C. D. Schmidz, *Sir Gareth of Orkeney.*, pp. 67-90 参照。

(71) *Arthurian Tradition*, p. 181.

(72) Paton, *op. cit*, p. 45, n. 1.

(73) *Celtic Myth.*, p. 84.

(74) *Works*, p. 326, ll. 3-5; p. 357, ll. 30-31; p. 358, ll. 33-34.

(75) Celtic *Myth*, p. 87; cf. D. D. R. Owen, *The Evolution of the Grail Legend* (Edinburgh: Oliver and Boyd, 1968), pp. 196-198.

(76) *Works*, p. 333, l. 25; p. 335, ll. 12-15; cf. *Celtic Myth*, p. 88.

(77) J. A. MaCulloch, *Medieval Faith and Fable* (London: Harrap, 1932), p. 38 参照。

(78) *Works*, p. 304, ll. 30-31; p. 308, ll. 17-21; p. 311, ll. 8-10. Lyones の予告については p. 328, ll. 9-10.

(79) *Works*, p. 300, l. 6; p. 305, ll. 11-12; p. 317, l. 25- p. 318, l. 8.

(80) *Works*, p. 328, ll. 4-5; p. 330, ll. 31-32; p. 332, ll. 9-10; p. 334, ll. 11-12. このうち, 二番目の passage は, Winchester MS では Lyonet がいった言葉になっているが, 'dame' はそれ以外では多く Lyones に与えられている点, また会話の内容からいっても, dame Lyones の誤りであろう。Caxton 版では dame Lyones となっている。

(81) *Works*, p. 322, ll. 1-9; p. 323, ll. 33-36; p. 327, ll. 33-34; p. 331, ll. 22-26.

(82) *Works*, p. 332, ll. 22-25; p. 332, l. 35- p. 333, l. 3; p. 333, ll. 20-23; p. 335, ll. 1-4.

(83) *Works*, p. 333, ll. 6-13; p. 333, l. 24- p. 334, l. 3; p. 335, ll. 7-24. Magic perilous bed の analogues については, M. Schlauch, *Antecedents of the English Novel 1400-1600* (London: Oxford University Press, 1963), pp. 76-77. Loomis は, この部分を Irish tradition に由来するとしている。'The Visit to the Perilous Castle: A Study of the Arthurian Modification of an Irish Theme,' *PMLA*, XLVIII (1933), 1021-1023.

(85) *Works*, p. 359, l. 23- p. 360, l. 5; p. 361, ll. 6-8; p. 363, ll. 11-12.

(86) Gareth と Gaherys との関係については, Loomis, *Medium Ævum*, XXV (1957), 186 参照。

(87) *Works*, p. 1441, note to p. 361, ll. 10-11.

(88) *Works*, p. lv. Cf. *Works*, p. 41, ll. 12-17; p. 77, ll. 26-28; G. Paris and J. Ulrich, edd., *Merlin: Roman en prose du XIIIe siècle*, I (SATF, 1886; rpt. New York: Johnson Reprint, 1965), pp. 120, 147; R. H. Wilson, 'Malory's Naming of Minor Characters,' *JEGP*, XLII (1943), 371.

(89) Arthur の sister の名は, 他のロマンスでは, Morgades, Morcades, Morchades などと呼ばれる。N. Newstead, *PMLA*, LXIII (1948), 809 参照。

(90) *Works*, p. 41, ll. 17-21. Morgause もまた 'a passynge fayre lady' である。

(91) *Arthurian Tradition*, p. 113-114, 181-182; *Medium Ævum*, XXV (1957), 186; cf. Paton, *op. cit.*, pp. 141-142; Newstead, *PMLA*, LXIII (1948), 805; A. D. H. Bivar, 'Lyonesse: The Evolution of a Fable', *Modern Philology*, L (1953), 168-169.

(92) *Works*, p. 339, ll. 6-10; p. 339, ll. 16-18.

(93) *Works*, p. 346, ll. 2-3; p. 359, l. 24.

(94) Tolkien and Gordon, *op. cit.*, ll. 2459-2462.

(95) Cf. Bliss, *op. cit.*, p. 20; *Arthurian Tradition*, pp. 88-89, 106-107; *Wales and the Arthurian Legend*, pp. 111-117. Morgause は Gareth に馬を与えている。*Works*, p. 340, ll. 4-5.

(96) Cf. Paton, *op. cit.*, p. 52; *Wales and the Arthurian Legend*, p. 113.

(97) *Works*, p. 345, ll. 14-24; p. 345, ll. 29-32. ここで Gryngamour の父への allusion がある。

(98) *Arthurian Tradition*, pp. 91-93 参照。

(99) Donner はこの点について若干触れているが, Fiester は扱っていない。

(100) *Malory's Originality*, p. 106.